

TA 説明会

梶原義実・吉田早悠里

名古屋大学文学研究科

中村：皆さん、集まっていたいてありがとうございます。教育推進室の中村といいます。よろしくお願ひします。今回「TA 説明会」を設けることになった趣旨を簡単にご説明したいと思います。

TA の問題というのは、TA の方が何か問題を起こしたということではなく、TA の在り方が、長年の研究科としての懸念といいますか、改善項目として常に挙がっています。もともと（TA 制度は）だいぶ前から始まったのですが、時給や1人当たりのTAに対する配分額がそれほど多くないけれど、授業のためにやってほしい仕事が多いなど、いろいろなところで悪循環になっています。配分額、TA の予算が限られている中で、TA の人数が少なくなれば1人当たりの配分額が多くなり、その分仕事はしていただけますが、それぞれがよりよい授業につながっていくのかという経済上の問題が一方にあります。これはあくまでも公金、税金が使われるものだから、ちゃんとしたお仕事をしたい、そのための手続きは全部会計監査の対象になりますから、その点はくれぐれも皆さんにご注意いただきたいのですが、その上で「この賃金に対してどのくらいの仕事を自分たちは要求されているのだろうか」ということになるのですが、その「賃金対労働」という観点を少し外して考えていただきたい点があります。

というのは、ティーチングアシスタントというのは、皆さんが今後、履歴に書けることなのですね、職歴。ですが、今のような先生のコピーだけをするとか、部屋の鍵だけを持ってくるとか、そういう小間使的なことしかしていないと、やはりそういうイメージが全体に伝わってしまい、名古屋大学でティーチングアシスタントをしたという、せっかく履歴に書いた1項目が十分に評価されないという悪循環に陥ってしまうわけです。なので、何とかこれを改善して、前・後期課程の方たちが先生の傍らでTAをしながら、先生はどのように授業をされるのかを学び、将来アカデミックポストに就かれる方や別の進路に進まれる方も含め、何らかの教育実習的な役割を果たしてほしいと

思っています。その後どういう進路に進まれるにしても、ご自分のキャリアとして活かしてもらえような機会として捉えてほしいと思うのです。その点では、支払われる報酬を低いと思うか高いと思うかは、それぞれの価値観にもなりますし、TA の仕事をするので何を自分は得たか、それがどのように自分の経験に活かされるかは、TA の皆さん次第ということがありますので、ぜひ頑張っていたきたいという気持ちでこういう説明会を行いました。

前回、TA のグッドプラクティスの例を挙げる「TA の活用術」という会を開きましたが、それを参考（資料）にしてありますので、ぜひ後で読んでください。今日は、前回お話しいただいた吉田先生に来ていただいています。吉田先生は、TA を経験されて今の立場に就いておられますから、いかに理想的にTA の経験を活かしてこられたかという1つのモデルとして見ていただきたいと思います。また梶原先生に教員の立場からお話ししていただきたいと思います。分野が違っていると、いろいろな点で「自分には全然当てはまらない」という方もおられるかもしれないのですが、自分にぴったりの分野の話というのではなく、どのくらい自分はその参考にできるか、どんなふうにして自分の分野に応用できるかというのは皆さん次第ですので、ぜひ今日のお話を参考に今後活かしていただきたいと思います。

それでは、まずは梶原先生からお話ししていただきます。お願いします。

梶原：考古学の梶原と申します。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

今回お話しさせていただく「教員の側から見たTA の活用法」ということですが、実は10年ほど前に着任したすぐくらいに、TA についてこういう場でお話をさせていただいたことがございまして、それ以来、考古学はTA を使う機会も多いですし、TA が比較的使いやすい学問分野でもあり、これはまた後から説明をしていきますけれども、そういうところから、このTA についてはいろいろ考える部分もありました。た

だ、ぶっちゃけた話を言うと、TAの活用については使われる側よりも使う側に問題があるのではないかと考えることが多いので、それを皆さんに言っても仕方がないので、ここでは院生さん向けということで、皆さんの気持ちの持ちようとしてTAをどのように活かしたらいいのかを、事例紹介を含めてお話をしたいらと思えます。

まず、教員がTAに求めること。それは先生方によって様々かと思われまます。私がTAに対して要求することと他の先生方が要求することは、違うということが多いかなと思えます。ですからあくまで個人的な見解としてお話しします。先ほど中村先生のお話にもございましたが、もちろんティーチングアシスタントですから授業補助なのですが、単なる授業補助ではなく、将来的に自身が研究者・教育者となったときの教授法を学び、またそれを自分自身で考えて発展させていくための訓練の機会であると捉えていただけたらと思えます。TAは履歴書に書ける教育実績となるわけで、それで教員の近くで学ぶ機会も得られ、しかも給料まで出ると。おそらく院生さんにとっては、使いようによってはいいこと尽くめの制度なのではないかと思えますので、有効活用していただければと思えます。単なる「ちょっと割りがいいアルバイト」ではない心構えでやっていただければと思えます。

将来的に大学教員になる方はもちろんこの中にいらっしゃると思えますが、そうでなくても考古とか歴史系の分野でしたら学芸員であったりとか、また中学・高校の先生になる方もいらっしゃるかもしれません。いわゆる高度専門職業人としても、TAの経験は十分に活かすことが可能だと思います。何らかの形で自分の専門を職業に活かす職に就けば、大学で教えるのと同じような局面に至ることは多々あるわけで、TAの経験は必ず生きてくると思えます。学生も教員も、TAに対する正しい理解と活用が、今必要とされているというように感じております。

ですから、先ほどコピーの話が出ましたが、授業に関する雑事を請け負う仕事と捉えずに、積極的に授業の内部に関わっていく。この先生はどういう目的でこういう授業を行っているのか、そしてわれわれにどういうことを学ばせようと思っているのか。授業を受ける学生に学ばせるという側面もあれば、少なくとも私は授業補助をしてくれるTAに学ばせるという側面も持たせながらTAを使っているつもりです。学生さんにも、それを受け止めていただく姿勢があったほうがいいのではと思えます。

と言いつつ、先ほどもすこし申し上げましたが、考古学というのは比較的TAをつけやすい専門分野です。なぜかといいますと、考古学では実習授業がありますが、この実習というのは、例えば遺跡を発掘するために測量をしたりとか、遺物を実測したりとか、考古資料の取り扱いを実際の器材や遺物を用いて学ぶ、いわゆるスキルを学ぶ系の授業なのですね。理系にもこういう授業は多いと思えますが、スキルを学ぶ授業は、教員1人でたくさんの学生を教えるより、教員と学生の間にはTAを置いて、TAが懇切丁寧に指導をするという体制が比較的とりやすいのです。

そういう意味で、例えば哲学系とか文学系とは少し違った側面ももちろんあるのかな、というふうには思えます。ですから1つの事例としてお聞きいただけたらと思えますが、考古学研究室では、まずは実習補助を基本としまして、次に特定のテーマについて実際に授業を行わせ、さらに発掘調査に関わる諸業務を担当させる。この3本立てでTAの活用を行っております。

まず実習補助ですが、こちらは教員（私）が、原理や実際の機材の扱い方等について解説・実演を行います。例えば遺跡測量だったら、遺跡測量の原理や意義を解説し、実際に機材を扱ってみます。その後学生に実際の作業を行わせていくのですが、その際、少数の学生グループごとにTAを配置し、その作業手順等について監督指導を行わせ、私だけでは目が届かない細かいところをTAにきちんと指導してもらい、といった形での授業補助を行っていただいております。受講学生にとっては少人数のきめ細かなサポートが受けられ、TAにとっても、教員の話や聴講しながら学生を指導することで自身のスキルの定着と向上が図れる。自分が教えることで学べるというのは実は非常に多いですね。私も、授業をしていく中で「このへんはまだ理解が足りなかった」ということを学ぶことが多いです。人に教えることから学ぶことは非常に多いです。そういったことを皆さんにも考えながらやっていただきたいと思えます。これは実際の実習補助の風景ですが、左のほうで機材を扱っているのが学生で、右のほうで指導っぽいことをしている2人が院生です。これはつい先週か先々週に撮ってきた写真ですが、こういう感じで作業と指導を行っております。

次にTAによる授業ですが、授業をどこまでTAに任せるかというのはなかなか難しい問題がありますが、アメリカなどではTAも積極的に授業に参加している事例が多いという話も聞いたことがあります。講義系の授業をそのまま学生にやってもらうのはなかなか

か難しいところがあるかと思いますが、実習の場合はそれなりに TA の活用の組み立てをすることが難しくありません。どうするかというと、まず教員が実際のカリキュラムでいろいろなスキルを学生に教える中で、特定のテーマを抽出いたします。たとえば考古学実習の授業カリキュラムの中において、写真の原理と撮影法、デジタルトレースの方法、ある特定の遺物の実測方法など、一つ一つテーマを切り取るわけです。本来はこういうのは私が全部教えるわけですが、そのうちの一部については、もちろんその場に私もおりますが、TA が直接学生に教授してもらいます。教育実習的な要素を TA に加味しているのとらえていただければ、分かりやすいかと思います。TA 個人も、例えば写真が得意な人があればパソコンが得意な人もありますので、各自の得意分野に従い担当を割り振り、授業計画書を提出させ、その内容について確認し、必要な指導を行います。その後、授業計画書に従って参考資料作成準備をさせ、実際に学生に向け各テーマについての解説を行わせております。

左が一昨年に TA に出させた授業計画書です。目的、方法、タイムスケジュールをざっと書いていただき、これについて説明をしていただき、こちらで指示を出します。そして右が、TA が学生向けに作った資料です。もちろん授業では概説書のコピーなど分かりやすい資料も配布されますが、著作権等の関係でここで出すのは控えていただきます。いろいろな資料を学生自身に準備させ、もちろんその過程には私も関わっております。こちらは実際に TA を使った授業で、左上がパソコン上での図面作成の仕方ですね。右は石器の実測方法の例です。TA にホワイトボードを使って解説をさせ、その後手取り足取り学生に書き方などを教える。こんな感じで進めております。

この試みは 2 年前からでまだ試行錯誤の状況ですが、いわゆる教育実習、しかも自分の好きな分野でやらせているので、TA にとっては自分の得意分野のテーマを選択し、学生に指導を行うことで、学ぶことや自信となることも多いのではないかと感じております。また、これはちょっと私的にも恥ずかしい話ですが、考古学では測量や実測に関する技術が急速にデジタル化しており、原理は私が説明できますが、いざパソコンを扱うとなると TA のほうがはるかにうまかったりする部分も正直なところ存在します。しかしそれも含めて、実際にスキルを獲得していく学生のためにも、パソコンに詳しい TA は積極的にそちらの方面で活用していったほうがいいのではないかと思います。

最後、発掘調査に関する諸業務ですが、考古学というのは発掘調査をやらなきゃいけません。考古学者として立ち立するには、やはり発掘調査をきちんと遂行できなければいけない。しかも発掘は 1 人でやるものではなく、多くの作業員や学生を指示しながら「ここ掘って」「そこ掘りすぎ」など、きっちり指導しながら発掘をしなければいけないので、結局ある程度人を使えないと考古学はできないのです。研究室では、実習の一環として 2010 年度から毎年、大学構内の遺跡発掘調査を行っており、その中で TA の活用と TA 業務を通じた院生の育成を図っております。どんな業務を担当してもらおうかという、ひとことで言えば発掘調査に関する作業「全般」ということになります。学生向けの事前説明会での解説、発掘調査の方法や遺跡の概要の学生向けの解説、機材を用いた遺跡の測量作業、あとはこれがいちばんメインかと思いますが、遺跡全体を見渡すのはもちろん発掘調査の総担当である私ですが、その中で「この部分のこのエリア」など特定の調査エリアは、院生にある程度任せながら発掘調査を進めていきます。これは発掘調査の遂行の仕方としてはごく一般的なやり方ですが、特定の調査エリアを担当させて、学生を指示しつつ調査を進行させております。また、遺物整理の遂行と学生指導、調査成果の展示公開の立案・遂行など、見ていただいたら分かる通り、本当に TA がいなかったら私がすべてやっていたような仕事がある程度 TA にお任せしている、しかも雑務とは到底言いがたいような作業をしていたらと思います。

こちらは実際の作業場と作業風景ですが、学生に対しての説明会や機材を用いた測量作業、この方が TA ですが、TA が学生を指示している図です。向こうのほうが遺物整理の作業ですね。こちら TA をつけて細かいところの作業をしていただいている、というように、本当に考古学研究室はいろいろな作業を大学院生に、TA の名の下でやっていただいております。正直なところ、これは言っていないのかどうか分からないのですが、労働時間という面でいうならば、おそらく TA 一人一人についている給料より、はるかにうちの院生は働いていただいている。ただ、こう言うのは何ですが、ある程度納得して働いていただいているところがあります。ではなぜ納得していただけるかというと、TA というのが単なるアルバイトではなく、自分自身の勉強になる、自分自身のスキルの強化につながるということを、院生自身に納得していただいているからかな、と思います。

今後に向けての課題ですが、1つに、TAの質の技術的差異が顕然として存在するわけですので、質のほうはともかくスキルの問題ですので、教授者や地域ごとに微差を持つ場合が多くて、うちの大学ではこういうふうに教えているけどよその大学では違うように教えているなど、細かい違いがたくさん出るので。特に他学から院生をとった場合、ずれが生じる場合もあり悩みどころではありますが、むしろその状況を、自校からの進学者の刺激として積極的に活かしていいのではないかと。「よその学校ではこうやってた」ということを、私も含めてお互い意見を出し合いながら「次からこういうふうに教えていこうか」と教員と自校出身のTA、他校出身のTAで話をしながら、変な話、他の大学でやっているいいところを盗み取りながらよりよい教授法ができていくのかなとも思います。

あとは実際問題、教員の負担としては正直自分でやったほうが早い仕事も多かったりしますが、これは使う側の教員の問題として、TA制度を院生教育の一環と捉えつつ育成目的で業務を与えていくことが必要なのかなと思います。皆さんに言っても仕方のない部分ではあります。

皆さんがこれからどういうお仕事を先生方から与えらうかは、分かりません。もちろん私がこう言っているからといって、コピーが悪いというわけでは決まっていなと思います。与えられた仕事の1つ1つに自分たちがどれだけの意味を持たせられるかというのは、皆さん方の心構えにかかっていると思います。例えば私がこういう仕事を与えたとしても、これを単なるアルバイト、雑務としてこなしていくのは難しくないうわい、教員から与えられた仕事をどう捉えていくか、皆さんのこれからのスキル形成、キャリアアップという意味でもこのTAの機会を有効に活かしていただけたらと思っております。

ご清聴ありがとうございました。以上です。

中村：ありがとうございました。最後に10分ほど、全体で質疑応答の時間を設けたいと思いますが、今ごく簡単なテクニカルな質問があればどうぞ。

では、吉田先生、お願いします。

吉田：こんにちは。吉田早悠里と申します。私は2014年度から名古屋大学の高等研究院で、YLC (Young Leaders Cultivation) の特任助教をしています。私自身、名古屋大学の文学研究科の博士後期課程出身で、その後、日本学術振興会・特別研究員PDを経て、現在に至ります。このような経歴のなかで、TAの経験がどのように役立つのか、自分自身のキャリアアッ

プにどのように結びついているのかについて、経験に基づいてお話ししたいと思います。

今日は、TAの役割と意義について、2点からお話ししたいと思います。1点目は、演習と講義の授業において、TAがどのような役割を果たすことができるのかについてです。2点目は、TAの経験が将来的に研究者、教育者、あるいは社会に出て企業で働くという人もいらっしゃると思いますが、社会に出たときにどのように役立つのか、ということについてお話ししたいと思います。

私自身、2007年に文学研究科の文化人類学・宗教学・日本思想史専門の後期課程に入学し、その年に1年間TAを担当する機会に恵まれました。これは演習でのTAでした。その後、後期課程を満期退学してすぐに2011年から日本学術振興会・特別研究員PDとして研究に従事するとともに、私立大学の学部1年生の総合演習という授業を受け持つことになりました。この授業は初年次教育で、入学したばかりの大学1年生に、文献を探す、文献を読む、レジュメを作成して発表をする、さらにはレポートを書く、という大学での学びにおいて必要な基礎的なスキルを習得させるという授業でした。ところが、それまで授業経験のなかった私は、どのように授業を行って良いのか全く分かりませんでした。手探りで授業を行うなかで気がついたのは、TAの経験がとても役に立っているということです。

まず、大学院の演習でTAとして私がどのようなことをしていたのか、演習でTAにどのようなことが求められているのかについてお話しします。一般的に大学院の演習では「発表」を中心に授業が進むと思いますが、発表者は、自分自身の研究をまだその分野について知らない人に、分かりやすく説得的・論理的に伝えることが求められます。学会発表でも、自分の発表を分かりやすく他者に伝えることは難しいわけですが、そういった発表の練習の場として演習があります。一方で演習の参加者にとっては、発表者が前期課程の学生なのか、後期課程の学生なのかといったことや、発表者の研究の進度に合わせて、発表者がどのような意図で、あるいは何を目的として発表しているのかを正しく理解した上で、自分自身が発表者の立場に立ってアドバイス、コメントをすることが求められています。このように、発表者と参加者の議論で演習は成立しますが、このなかで発表の組み立て方、議論の仕方など、論理的な思考を習得していくのが演習です。ここで求められるTAの役割とは、司会を担当し、

発表を円滑に進行させることだけではありません。発表者と参加者の意見を取りまとめ、発表者と参加者の間に立って議論を形づくっていくことが、TAに求められているのです。

私自身、TAを担当しているときは、こういったことは全く意識していませんでした。このようなことに気がついたのは、非常勤講師として大学1年生の授業を受け持つようになってからです。なぜ気がついたのか、簡単に事例をお話ししたいと思います。私が担当していた演習では、学生たちはまだ問題意識も乏しく、学部1年生といっても高校4年生のような部分があります。そういった学生が初めて発表するとき、発表目的をうまく表現できない、発表の意図や内容を他人にうまく伝えられないという問題が生じます。そうすると発表を聞いている参加者は、発表者が何を発表しているのかよく分からないので、発表目的も分からない、意図も分からない、内容も理解できず、質問もできないという状況に陥ってしまいます。そのため、的外れな質問や全く異なる角度からの質問が出ることが多々ありますが、そうすると今度は発表者が質問に答えられないということが生じます。発表者は発表内容をうまく伝えることができないし、問われた質問も理解できないので回答することもできません。参加者は、何についての発表なのか分からないので質問もできないし、質問しても内容とずれてしまいます。その結果、最終的に議論が成立しないという問題が発生します。このような状況を目の当たりにして、私が学んだことは、全体を把握・理解し、その上で発表者と参加者の間のずれを取り持つような役割を、教員が果たさなければならないということでした。

実はTAにも同じ役割が求められています。先ほどの大学院での演習では、発表者と参加者で議論がなされても、その議論がどのような方向に進むのがいいのか。例えば、後期課程の学生であれば1年生なのか、あるいは博士論文提出間近の学生なのか、段階によってアドバイスが異なるはずですが。専門事項について詳しく教えるのか、大きい議論の道筋を提示するのか。TAは、議論の方向性を形づくるという役割を果たすことができるのです。そのことを意識しながら、TAとして演習に参加すると、生産性の高い議論が可能になるし、自分自身の視野も広がります。見え方が変わってくるので、論文を記述する際に、どうしたら論理的に伝わるものになるかということも習得できます。

ここまでは演習での話でしたが、私はこの4月から学部の講義を担当することになりました。講義を担当

するようになって初めて、いかに自分が講義をまじめに受けていなかったかということに気づいたのですが、どういう点に着目しながら講義のTAを担当するといのかということについて、最近の経験からお話しします。私はかれこれ8～9年くらい講義を受講したことがありません。後期課程に入学してからは、一度も講義を受講したことがありません。こうしたなかで、4月から講義を受け持つことになり、シラバスの作成と提出を求められました。しかし、15回の講義をどのように構成し、どのあたりに焦点を置いて授業を行うのが良いのか、見当もつきませんでした。そのため、過去の先生方のシラバスを参考にしました。また、授業が始まると、90分という授業時間のなかで、どのような時間配分でどれくらいの分量の授業を行ったらいいのか、実際に教壇に立つまで分からなかったのです。

皆さんがTAとして講義に参加する場合は、単位を取得することが目的ではありません。そのため、授業の内容を詳しく勉強するというより、先生方がどのように授業を運営し、半期を通してどういった構成で何を伝えようとしているのかを盗む、という意識を持つといいのではないかと思います。

そこでは、大きく2つのポイントがあると思います。1点目は、授業全体つまり半期15回の授業で先生が何を伝えようとしているのか、何を目的あるいは達成目標とし、初回から最後の15回までにどういったストーリーで授業が構成されているのか、全体を見渡すことです。

2点目は、毎回の90分の授業がいかに構成されていて、先生方がどのように授業をしているかに注目してTAをすると良いと思います。実際に講義を担当してみると、自分が用意していた資料が70分くらいで終わってしまって時間が20分余ることや、逆に時間が足りなくて早口になり、駆け足になってしまうことが多々あります。そのため、90分をどれくらいのボリュームで構成するのか、どうしたら学生たちは集中して聞いていられるのか、先生方はそういう点にどのように気を付けているのかに注意します。そうすると、毎回の90分の授業で、先生方がどれくらいの分量の資料やレジュメを作成して、いつ頃それをTAに渡しているかも、授業準備という点で参考になります。

そのほかに難しいのが、黒板やホワイトボードの使い方です。実際、教壇に立って黒板やホワイトボードを使おうと思っても、初めてだとなかなかうまく使え

ません。1回書いたあとですぐに消してしまったり、パワーポイントを使用していて、自分のペースでスライドを次に進めていると、学生はノートの筆記が全く追いついておらず、まだ筆記が終わっていないのに私がスライドを進めているということが多々あります。先生方が、授業でどれくらいのペースでスライドを進めているのか、どれくらいの分量の情報をホワイトボードに書いているのか、そういった授業を進める上でのテクニックに注目しながら TA として授業に参加するのがお勧めです。リフレクションシートを回収するのも TA の業務にあるかもしれません。その日の授業に出席していた学生が、授業のどのような内容に興味を持ったのかを、リフレクションシートを通して生で感じることができます。そのため、リフレクションシートを回収する際にも、自分自身が将来的に授業を担当するときに「こういうのを使おうかな」など、技術・知識を盗んでいくのが大切だと思います。

最後に、TA の意義と可能性についてまとめます。教員や研究者だけではなく、社会に出て企業などで働く上でも TA はキャリアのひとつとして重要な意味があると思います。それは、一歩引いた視点で全体を見渡す力をつけることができるという点です。例えば演習では、発表内容や質問内容を全体的に把握する力を意識的につけていくことによって、議論を総合的に組み立てることができますし、それが将来的な研究者としてのステップアップにもつながります。あるいは演習のなかで司会や議論をリードする役割を担うことで、突然、座長や司会の依頼があったとしても、戸惑うことなく対応することができます。

社会に出て働く場合でも、異なる分野や立場の人と話をするとき、自分の専門や立場からだけではなく一歩引いた視点で見ることができます。自分はどうのような役割で、どのような仕事を担当しているのか、他の人との関係において自分の立ち位置を捉えることができるので、TA の経験は社会に出る上でも活かせると考えています。

私からは以上です。

中村：ありがとうございます。

主にゼミやフィールド系の方が TA をつけやすく、そういう方も多いと思いますが、一方で文学研究科というのは文献学が多くて、演習とはいっても文献講読、という授業の TA になっていらっしゃる方も多いと思います。そういう中でお二人もうまくまとめて下さったので、自分の分野だったら何ができるだろうか、先生はこういうことをさせてくれないけどさせて

もらえないだろうか、自分は学会発表が苦手だけど授業の中ではちょっと冒険できないだろうかなど、TA の機会をいろいろ活かしてほしいと思います。それはべつに教員としてということではなく、人とどうやってコミュニケーションをとるか、自分の考えていることをどうやって伝えるか、そういう基本的なスキルにつながっていくのではないかと思います。そういう意味で、前回吉田先生に実に典型的な形で TA というチャンスを活かしていらっしゃるといってお話につくづく感心して、今回もお願いした次第です。

吉田：ありがとうございました。

中村：せっかくですので、今までの中で「こういうときどうしましょう？」など何かありましたらどうぞ。どちらの先生に対してでもよいですので、助言やアドバイスなど、せっかくですからどうですか。

なかなか言えないですね。困っていらっしゃる点があるかもしれないですが、こういう全体的なところで言いにくいかもしれないし、いきなり自分の分野に応用できないということもあるかもしれないのですが、今日のようなお話を聞いた上で、改めて自分が関わっている授業を一歩引いた視点から見直して、「では、自分はどんな役割を果たしているのだろうか」というふうに見ていただけたら、この説明会をやった甲斐があったかなと思います。

では、補足的に何かよろしいでしょうか。飯田先生。

飯田：今のところ大丈夫です。

中村：今のところですか（笑）。

飯田：司会をするのに加わっていらしゃったということですが、教員のコメントをどういうタイミングで引き出すのかと、教員との掛け合いということも、TA の技術の中に入ってくると思いますが、そのあたりはいかがでしたか。

吉田：はい、ありがとうございます。そうですね。発表後すぐに「では先生、いかがでしたか？」と伺うと、先生がずっと話をしてしまったり、大きな問題系に接続してしまったりして、今度は学生が意見を発言しにくいという状況が生まれてしまいます。特に前期課程の学生は、質問しづらくなります。理論的なことではなく事実確認だったのだけれど今さらこんなこと聞けない、という雰囲気が出てしまいます。そのため、初めは先生にはご意見を伺わないで「では皆さん、質問がある方からお願いします」といって、必ず学生に聞いていました。そうして、議論が煮詰まってきたり議論が逸れかかってきたりしたときに引き戻し

ながら「では、ちょっと先生いかがでしょう？」と、最後に先生に伺うようにしていました。

おそらく先生も、TAは誰でもいいというふうではないので、ここにいる皆さんは選ばれた方々だと思います。TAをお願いする先生も、そうですね？（笑）。そのため、やはり皆さんに頑張っていたきたいと思っています。

中村：あといかがでしょうか。

飯田：もう1ついいですか。では、今度は梶原先生に。複数のTAが1つの授業に入っていらっしゃるように今うかがっていたのですが、TA同士の打ち合わせなどはなさっているのでしょうか。

梶原：一つ一つの授業に関しまして、事前にTAたちと意思疎通を図るようにはしておりますし、授業をさせるときは、1つのテーマについてTA一人をつけてやらせるのですけれども、その中では綿密に連絡はと

っています。ただ、TA同士ということになると今後の課題かなと思いますし、おそらく院生室でそういうことはみんなしゃべっているのではないかと思います。そこに教員がどのように関わっていくかは、今後の課題としてやっていきたいとは思っております。

飯田：大変今日は参考になりました、このような機会をありがとうございました。

中村：いかがですか。あとよろしいでしょうか。

では、今日はみんなありがとうございました。いろいろ忙しいと思いますが、やはりちょっと聞いて、また違ってくるものが多ければ、この時間を無理してきてもらった甲斐もあったと思いますので、ぜひ今後、自分の経歴として使ってってください。どうもお疲れさまでした。先生、ありがとうございました。（拍手）

TAの活用法 ～教員の側からみた～

教員がTAに求めること

- 先生方によって様々かと思われるが、あくまで個人的見解として…
- 単なる授業補助ではなく、将来的に自身が研究者・教育者となったときのために、教員の教授法を学び、またそれを自身で考えて発展させていくための訓練の機会。
 - …履歴書に書ける教育実績にもなり、教員の近くで学ぶ機会も得られ、しかも給料まで出る。

教員がTAに求めること

- 大学教員でなくとも、学芸員や中高教員など、高度専門職業人としても、TAの経験は十分に活かすことが可能。
- 学生側も、また教員の側も、TAに対する正しい理解と活用が必要とされている。
- 授業に関する「雑事」を請け負う仕事ととらえず、積極的に授業の内部に関わっていく、関わらせていく姿勢が必要では。

考古学研究室での事例

- 考古学研究室では、「実習」の授業にTAを付けている。
 - 実習：遺跡測量や遺物実測など、考古資料の取扱いを、実際の機材や遺物を用いて学ぶ授業。
 - また発掘調査や遺物整理を授業の中で実際におこなう。
 - 考古学の諸授業の中では、もっとも重視している授業。

考古学研究室での事例

- 実習系の授業は、スキルの獲得を目的とするものが多いので、TAが比較的付けやすい、効果的に活用しやすいという側面。
- 考古学研究室では、
 - ・「実習補助」を基本とし、
 - ・特定のテーマについて、「実際に授業をおこなわせる」こと、
 - ・さらに「発掘調査に関わる諸業務を担当させる」ことで、TAの活用を図っている。

実習補助

教員が原理や実際の機材の扱い方等について解説・実演



学生に実際の作業をおこなわせる



その際、少数の学生グループ毎にTAを配置し、作業手順等について監督・指導をおこなわせる。

- 受講学生にとっては、少人数ごとのきめ細かなサポートが受けられ、またTA自身にとっても、教員の話を聴講し、それに従い学生を指導することで、スキルの定着と向上が図れる。

実習補助



TAによる授業

教員が実習のカリキュラム内での、特定のテーマを抽出
(土層断面図の作成方法、写真の原理と撮影法、
デジタルトレースの方法・石器実測法 etc...)

↓
TAごとに各自の得意分野に従い担当を割り振る。

↓
授業計画書を提出させ、その内容について確認し、必要な指導をおこなう。

↓
授業計画書に従って諸参考資料を作成・準備させ、実際に学生に向けて各テーマについての解説をおこなわせる。

授業計画

「考古学実習」 題目：デジタルトレースの方法

日時：2014年1月21日3限
参加：学部2, 3年, 研究生

1. 目的
 - デジタルトレースに用いるソフトの操作方法を習得すること
 - トレースの方法とデジタルトレースの長所及び短所を理解すること
2. 方法
 - 操作しながら各自取り込みから完成までを一通り行う
 - 同じ図面をトレースしそれぞれの作成した図を比較する
3. タイムスケジュール (90分)
 - 授業の目的と方針の説明
 - Photoshop, Illustrator を使用しながら取り込みからトレースまでを説明 (10分)
 - 各自交代で練習 (20分×4交代)
 - 線の引き方を練習
 - 線の太さや破線、修正の方法を練習
 - 手の空いている人はペントレースを行い、作成した図を比較する
 - ペントレースした図をスキャンし、作成した図の比較を行う
4. 用いる教材
 - レジユメ
 - トレースする原因 (過去の整理作業の図面を用いる)

考古学実習

デジタルトレース

1. はじめに トレースの意義と方法
Defトレース 「原因を詳細などに透かして、書き写すこと」(デジタル大辞典より)
2. デジタルトレースの特徴
長所
：個人の技術に左右されにくい 太さや点線が均一 修正が可能 拡大した状態で作業できる。トレース後の加工が容易
短所
：操作の習得が困難 手書きのニュアンスが損えてしまう データが壊れる可能性
3. 方法
用いるソフト：Photoshop, Illustrator
Step1. 原図を取り込む
Photoshop で読み込み→必要な部分を切り取り、加工→保存。
Step2. Illustrator で開く
アートボードの設定→配置
Step4. レイヤーを重ねる
レイヤーパネルの表示→新規レイヤーの作成→原図のロック
Step5. ペンツールでトレースする。
Step6. レイヤーを重ねトーンや破線などをトレースする
1枚のレイヤーには1種類の線を描くことの加工が容易 (外形、調整、トーンなどを別層のレイヤーに)
Step6. 保存する
4. 用いる用語、操作
ペンツール
はさみツール
アートボード
レイヤー
選択ツール・ダイレクト選択ツール
塗り、線
はさみツール
ベジェ曲線
Alt+スクロール、Ctrl+スクロール、Ctrl+Z

さらに勉強するために
Photoshop, Illustrator, ともに解説書などが多数あるため必要に応じて参考にする。

参考資料1 TAによる授業計画書

参考資料2 TAによる授業配布資料
(授業では同時に概説書等のコピーも配布されているが、著作権等の関係で提示は控える。)

TAによる授業



TAによる授業

- この試みは2年前からおこなっており、まだ試行錯誤の状況だが、TAにとっては自分の得意な分野のテーマを選択し、学生に指導をおこなうことで、学ぶことや自信となることも多いように感じている。
- また、考古学では測量や実測に関する技術が急速にデジタル化しており、原理は教員が教授できるが、実際の技術面では、むしろTAを務める大学院生のほうが、飲み込みが早く優れている部分も、正直なところ存在する。



受講学生のためにも、むしろ積極的に活用する利点ともいえる

発掘調査に関わる諸業務

- 多くの学生や作業員を指示しつつ、発掘調査をきちんと遂行できることは、考古学者として絶対に必要なスキルである。
- 考古学研究室では、実習の一環として、2010年度から毎年、大学構内遺跡の発掘調査をおこなっており、その中でTAの活用とTA業務を通じた大学院生の育成を図っている。

発掘調査に関わる諸業務

- TAに担当してもらう業務：
- 学生向けの事前説明会での解説
(発掘調査の方法・遺跡の概要 etc...)
- 機材をもちいた遺跡測量作業
- 遺跡全体の調査遂行を行う教員の下で、特定の調査エリアを担当させ、学生を指示しつつ調査を進行させる。
- 遺物整理(水洗・注記・接合・実測等)の遂行と学生指導
- 調査成果の展示公開の立案・遂行



今後へ向けての課題

- TAの質および技術的差異：
発掘調査等に関するスキルは、教授者や地域ごとに微差をもつ場合も多く、とくに他学から大学院生を取った場合、ややズレが生じる場合もある。
⇒ むしろその状況を、自校からの進学者への刺激として積極的に活かしていくことも
- 教員の負担：
正直、自分でやったほうが早い仕事も多い。
⇒ TA制度を大学院生教育の一環ととらえつつ、育成目的で業務を与えていくことは、むしろ教員側の工夫に掛かっているのでは。

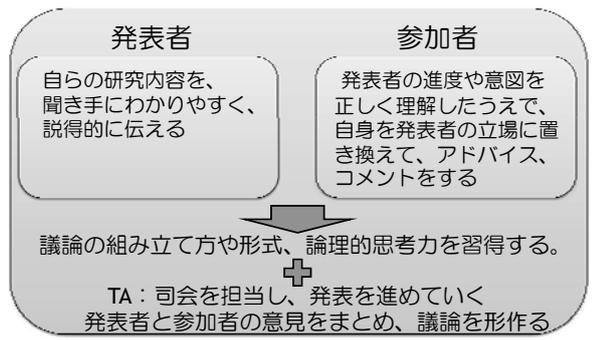
研究者・教育者へのステップ TAの可能性

高等研究院・文学研究科
吉田早悠里

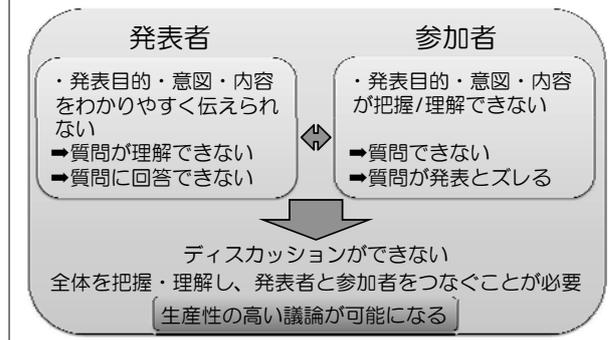
TAの役割と意義

- TAが授業（ゼミ・講義）のなかでどのような役割を果たすことができるか
- TAの経験が、研究者・教育者としてのキャリアにどのように結びつくのか

ゼミにおける学びとTA



TA経験が生かされた事例 —私立大学学部1年生の基礎演習(2011年～)—



講義におけるTA

授業を全体から見渡す

- シラバス
- 15回の構成

個々の授業を見渡す

- 90分の授業内容の構成
- 資料・レジュメの内容
- 黒板・ホワイトボードの使い方
- 学生の反応

TAの意義と可能性

—教員の経験からみえてきたこと—

- 将来、教員になるための準備として意識的にTAの業務に携わる
- ↓
- 一歩引いた視点で、全体を見渡す
 - 発表内容・質問内容を全体的に把握し、議論を総合的に組み立てていく力を養うことができる
 - 教員としての指導に加えて、研究会や学会における司会、座長の訓練につながる